

INMP ニューズレター第 11 号

2015 年 5 月



International Network of
Museums for Peace

「平和のための博物館国際ネットワーク」ニューズレター

「戦争をストップさせる女性の力」100 周年を記念して

世界で最も古いそして現在も存続している、国際的な女性の平和組織である「平和と自由のための女性国際連盟」(WILPF)は、4月22日から29日まで、ハーグにて100周年記念の代表者議会および会議を開催した。80カ国から約900名が参加した(4名のノーベル平和賞の受賞者も含めて)。WILPFの会議は1915年4月末、まさに第一次世界大戦の最中、今回と同じハーグにて行われた、注目すべきそして想像上の国際女性議会において設立された。戦争国そして中立国の女性たちが、戦争を終結させる手段と将来の平和の事業を議論し、同時に、女性たちの声も聞かれるべきことを要求した。1915年の議会で採択された決議は、戦争や平和の問題に女性の参加を謳った、画期的な国連安全保障理事会決議1325(2000)を予兆するものであった。INMPはこの100周年記念会議の3つの関連イベントを主催したり協力したりした。

ピース・パレスにおいて4月25日、アレッタ・ヤコブス(1915年会議の中心的な参加者であり、婦人参政権論におけるオランダ人パイオニア)の胸像の除幕式が行われた。それに続いて平和宮前で、「アレッタ・ヤコブスと他の勇敢な女性たちに捧げる」という祭典が行われた。

20人の女性たち(それには戦争の制約によってハーグに来ることができなかった何人かの女性も含む)の肖像のボードが高く掲げられ、メディアや訪問者の注意を引いた。INMPは、国際女性同盟、オランダWILPF、そして他の女性グループとこのイベントを組織するのに協力した。そこには何人かのINMPの仲間も参加した。このイベントを企画・組織し、またINMPを大いに支援してくださったハーグのペトラ・ケプラーさんに特別の感謝を捧げたい。

数日後の4月28日、INMPはベルタ・フォン・ゾットナー会館で、「1915年の生きた記憶」と題するラウンド・テーブルを主催し、多くの人が出席した。それは、歴史的な記録フィルムを女性・平和・人権の教育にいかに関与するかに関するものであった。立案者は1915年の会議に関する貴重なフィルムを発見したマルテン・ファン・ハルテン(INMPのコンサルタント)である。その映像の一部はシャーロット・ビル監督の素晴らしい『危険な女性たち』(1915年における英国女性代表団の活動のドキュメンタリーであり再現である)に使用されている。タイトルはウィンストン・チャーチルの言葉から引用されている。この25分の短い映像は

<https://www.youtube.com/watch?v=0a2xYvXwGiw&feature=youtu.be>

で見ることができる。映写会のあとのラウンド・テーブル討議は、INMPのウェブサイト参照されたい。



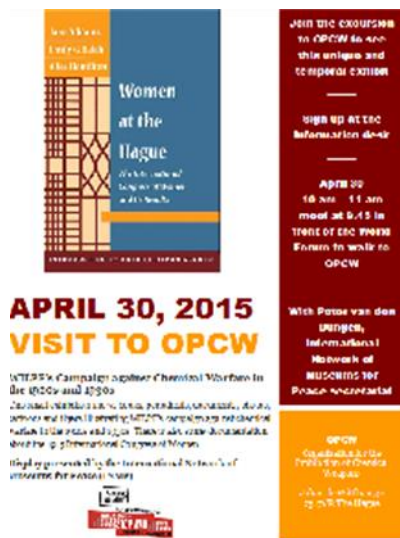
WILPF100周年記念会議は、化学兵器禁止組織(OPCW)の本部の隣にあるワールド・フォーラムで行われた。WILPFは1920・30年代における化学兵器に反対するキャンペーンの最前線にあったからである。

この主題に関する小展示を組織し、その実行に当たってほしいとのINMPの要請をOPCWは受け入れた。この小さな展示は2週間にわたってOPCWの広いラウンジで行われた。それはまた、OPCWが主催する化学戦のすべての犠牲者を記念する式典と同じ日程に当たっていた。WILPFの参加者も少数ながらこの展示を見学した。



(ラウンド・テーブルの参加者。左はリスカ・ブロードゲット、後はペトラ・ケプラー、そしてマルテン・ファン・ハルテン)

印象的で人を鼓舞するWILPF100周年記念会議——「戦争をストップさせる女性の力」との大胆なテーマのもとで開催された——のハイライトの映像は、この[リンク](#)で見ることができる。



(Willemijn M. Lambert によるビラ)

2015年は戦争で毒ガスが使われて100年目

第一次世界大戦では、空爆・潜水艦の登場に加えて「毒ガス」が大量殺戮の手段として登場しました。毒ガス兵器の開発者は、大気中の窒素を固定して窒素肥料の大量生産を可能にしたことでも知られるノーベル化学賞受賞者のフリッツ・ハーバー(ドイツ)。科学・技術の軍事利用の危険性を警告する例として、しばしば紹介されます。同じ化学分野出身の妻クララは、毒ガス開発に抗議して自ら命を断った。

デイトン国際平和ミュージアムはオハイオ(米国)の良心的兵役拒否者を顕彰する

デイトン国際平和ミュージアム渉外コーディネーター
デボラ・ホグスヘッド

ジム・キンケードがABC イブニング・ニュース(米国)で、テッド・スタッドベーカーの死を報道したのは1971年5月4日であった。ベトナムのディ・リンでのこの良心的兵役拒否者の死からちょうど44年目に当たる2015年4月26日、デイトン国際平和ミュージアムは彼の記憶を祈念するために新しい展示を行った。6日後の5月2日、1つの団体がこの平和のヒーローの足跡の展示を鑑賞し、彼への追憶の念を新たにした。それはちょうどブレスレン・ウェストミルトン教会において彼の記憶を祈念する礼拝日の前日に当たっていた。スタッドベーカーはミルトン・ユニオン高校を1964年に卒業し、兵役に登録したが、良心的兵役拒否者として分類されることを要求した。兵役に代替する奉仕を終え、スタッドベーカーはベトナム・キリスト者・サービス(VNCS)に加わり、ディ・リンに移動し、そこで彼は少数民族であるモンタグナードを支援し、その農業改良事業に従事した。1971年4月26日、ボランティアの仲間と結婚し、3年目の奉仕の契約にサインしたとき、VNCS奉仕団に対する攻撃でスタッドベーカーは殺害された。キンケードはベトコンがスタッドベーカーを殺したと報道したが、彼の死に誰が責任を負うのかに関していくらか不確実なところが残っている。彼の7人の兄弟の何人かが展示の開会式とピース・ヒーロー・ウォークに参加した。ピース・ヒーロー・ウォークの目的は、平和のヒーローたちの物語を顕彰し、ピースメーカーの新しい世代

を鼓舞することである。スタッドベーカーの他の親類もイベントに参加した。

2015年5月2日が含まれる4月26日の週は、デイトン市長のナン・ウェイリーによって「ピース・ヒーロー週間」とされ、またウェスト・ミルトン市長のジェイソン・ティナーマンによって「テッド・スタッドベーカー週間」とされた。新しい展示は次のものを含む。スタッドベーカーがベトナムで弾いていたギター、40ミリの薬莖（VNCS ボランティア事務所に対する攻撃で用いられたものと類似のもの）の形に似せて作られた花瓶（彼はベトナムから米国にいる兄弟のガリーに送っていた）、そしてミュージアムの訪問者に青年の彼の印象を伝える展示パネルである。展示室にある小型テレビからはウェブサイトへアクセスでき、ウェブではバーチャルな部分の展示を見ることができる。それには、写真、スタッドベーカーが歌ったりギターを弾いている音声記録、彼の死の数カ月前に行われたインタビューの音声、2014年7月に記録された彼の7人の兄弟姉妹の映像インタビュー、そして新聞記事や賛辞の電子記録が含まれる。これらのバーチャルな展示は[リンク](#)で見ることができる。それはさらに「ピース・ヒーロー」の展示のリンクにつながっている。

「ピース・ヒーロー・ウォーク」は、デイトン国際平和ミュージアムが「グレイター・デイトンのコミュニティと正義のための国民会議」（National Conference for Community and Justice of Greater Dayton）の協力を得て開催するもので、5月2日に River Scape Metro Park, III E. Monument Ave., Dayton にて開始される。「ピース・ヒーロー・ウォーク」のより詳細な情報は[ここ](#)から入り、Peace Heroes Walk へのリンクを見られたい。



テッド・スタッドベーカー

ゲルニカ平和ミュージアム財団： メモリアルLAB プロジェクト

ゲルニカ平和ミュージアム館長

Iratxe Momoitio Astorkia

メモリアルLABとは、記憶実験室プロジェクトのことである。平和の文化に広範な経験を有する三つの財団（Gernika Peace Museum、Bakeloa and Gernika Gororatuz）が、ファシリテーター・チーム（Alex Carrascosa and Inigo retorazn）によるコラボレーションを得て、スペインのバスク地方において蒙った暴力による社会的記憶地図を作り出そうとするものである。全体としてのプロジェクトの目的は、過去を反省することによって市民的・社会的な和解に寄与しようとする。メモリアルLABの目的は次のようである。

- ・市民による貢献を社会的記憶マップに示す（各自の貢献をウェブ・スペースで示す）。
- ・多様な対話によって様々な経験や公共の出来事を収集・社会化する（銀行の主導による）。
- ・多様な市民をエンパワーする。そのための社会的・教育的手段を整備する。
- ・対話のための教材を開発しシェアする。

メモリアルLABはその時々必要に応じた多様で豊かなメソッドを使う。ファシリテーション・チームによって用いられるモデルの大部分は、プロセス・ワークやU理論のメソッドのような紛争転換のパラダイムに基づくものである。それは3つの段階に分れる。

- ・われわれの過去を分析する。すなわち、メモリー・ラボラトリーに参加する個々人の視点から、何が起こったのかを分析する。
- ・現在において何がわれわれに必要なかを学ぶ。われわれは過去から何を学び、未来に何を役立てることができるか？
- ・未来への指針。われわれは一緒に何を行うことができるか？

ゲルニカ平和ミュージアムのこのプロジェクトは、2013年に行われた2日間に亘るある会合から始まった。そこには年齢も社会的背景も違う28名の参加者が集まり、閑静な個別の部屋でわれわれの悲惨な過去の暴力、現在、そして未来について共に語り合った。2014年には、バスク地方の異なる場所で3回のさらなる会合を持った。そのアイデアは、近年のわれわれの暴力の歴史に関して社会的な記憶の地図（証言、遺物など）を共に創造し、ウェブサイトに掲載することである。

(ゲルニカ平和ミュージアムにおける新展示)



ゲルニカで破壊された文化遺産のある地域の戦後における再建

戦争後、文化遺産はしばしば再建過程を指導する一つの要素となる。このような再建を動機付ける二つの主要な要因がある。第一は、破壊によって失われたものを修理・保存・修復したいという欲求であり、第二は、社会の再建にあたって、過去から将来に向けて何を取り出すかに関して、主要なモニュメント、サイト、様式、そして価値を新たに選択することである。両者とも何を再建するかということを含む。そして、そのことによって歴史の選択的構成においてどんな結果が生み出されるかが決まるのである。より重要なことは、そうした過程は、新しい歴史を作り出すのに過去を再解釈すること、見直された公の価値的枠組みを伝達することを含み、これら二つの戦略は、権力にある者を正当化するのである。戦後の完全に新しい社会をそこから作り出すような白紙の黒板などはない。選択として拒否しようが賞賛しようが、過去は将来に関する決定および展望を伝達する。この展示はこうした問題を提示し、戦後の文化遺産の再建が、モニュメントの再建や町の復興以上のものに関わっていることを示そうとする。

「ウィーン平和ミュージアムの平和教育」 館長：アリ・アフマド

ウィーン平和ミュージアム(PMV)は、アメリカの公民権運動を率いたマーティン・ルーサー・キング Jr. など、平和運動のヒーローの生涯を通して平和について学ぶ会を催した。オーストリアの10代の若者十数名が参加したが、会の後半には平和とは何か、平和のために何ができるか、それぞれの思いを話し合う時間を持った。パノネウム経済大学の学生たちだが、その日(4/9)ミュージアムを訪れていた旅行者たちも加わった。マーティン・ルーサー・キング Jr.について学ぶことから始まり、PMVのユニークな平和教育プログラムや「平和の窓」のことも学んだ。かようにPMVでは、ネルソン・マンデラやマハトマ・ガンディなど、非暴力で市民抵抗運動を進めた平和のリーダーについての平和教育に取り組んでいる。

グループリーダーのダニエラ・スタイナーさんは、マーティン・ルーサー・キング Jr.が取り上げられていることを嬉しく思い、自分の学校にもPMVの専門家を招くことを約束した。スタイナーさんにとって、平和とは他者を敬うことだという。「人間は誰でも過ちを犯しますが、そのことを謝罪すべきです」と述べた。



「テヘラン平和ミュージアム：平和への協働」

オーストリアの有名な女優と日本人の教授が立命館大学国際平和ミュージアムで出会い、テヘラン平和ミュージアム(TPM)での平和プログラムに向けて協働した。

2014年11月、ウィーンの有名な舞台女優、マクシー・ブラハさんが立命館大学国際平和ミュージアムを訪問した。そこで、交換留学プログラムで京都に来たTPM ボランティアの仕事を知り、イランの平和ミュージアムに興味を抱いたマクシーさんは、自らの目でTPMを観ようと決心したのだった。

テヘランのオーストリア大使館にあるオーストリア文化フォーラムの支援を得て、マクシーさんは2015年3月イランを訪問した。彼女は、独自の方法で平和の文化を分かち合いたいと願い、一人芝居を演じることを申し出た。それは「情熱に燃える魂—ベルタ・フォン・ズットナーの生涯」で、舞台用に創られ国際的にも認められている作品だ。ズットナー(1843-1914)は、オーストリアの婦人参政権論者で平和活動家であり、女性として初めてノーベル平和賞を受賞した人である。

「私はズットナーの『武器を捨てよ』を読み、すぐに劇作家の友人に劇を書いてほしいと頼んだのです」と、マクシーさんは言う。これが彼女の平和上演の始まりだった。できるだけ多くの人にこの劇を観てもらいたいと、2015年5月TPMで、女性スタッフ、ボランティアや友人たちの前で特別公演を行なった。

ベルタ・フォン・ズットナーの平和活動とTPMとは特に関連がある。世界平和への献身的努力の中で、ズットナーは1899年と1907年のハーグ平和会議に積極的に関わり、それらはハーグ条約へと繋がった。だが哀しいことに、1914年からの戦争を止めるには至らなかった。しかし、大量破壊兵器を制限することや、国家間の紛争を平和的に解決することを目指す協定の基礎を築くことにはなったのである。

最近、TPMはフィンランドの平和活動家とも繋がるようになった。ヴァプ・タイパレさんとイルッカ・タイパレさんが、フィンランド大使のハリ・カマレイ

ネンさんと共にイランを訪問したのだ。タイパレさん夫妻は卓越した精神科医(博士)で、国会議員や社会活動家でもある。ヴァプさんは子どもや青春期医療に携わり、イルッカさんはホームレスや囚人、失業者を支える活動もしている。

ミュージアムを訪れたタイパレ夫妻は、化学兵器の生存者がミュージアムに関わっていることを評価した。イラン・イラク戦争での化学兵器攻撃と回復について、直に生存者から話を聞いたことに感謝し、戦争の恐怖を通して平和について学べる独特の機会だと述べた。ミュージアムを去るにあたって、イルッカさんは最新の著書『フィンランドの100の社会改革』のペルシャ語版をTPMに贈った。(詳しくはTPMのウェブサイトでご覧下さい)



アート展

『ヒロシマを越えて—抑圧されたものの回帰』

「対話とアート」 ショシ・ノーマン 学芸員
(ガリラヤ国際経営研究所、中東・宗教学研究)

アート展『ヒロシマを越えて—抑圧されたものの回帰』について、第二次世界大戦の恐ろしい記憶を風化させないために、第三世代は重要な役割を担うべきだという私の意見を述べたい。このアート展はアイェレット・ゾハーさんによって企画され、テルアビブ大学のゲニア シュライバー、アートギャラリーで2015年4/24~8/15に催され、12人の若い日本人アーティストの作品が含まれている。(10のインスタレーションとビデオアート、50の写真作品)

ヒロシマのトラウマに関わる日本の第三世代アーティストと、ホロコーストに関わるイスラエルのユダヤ人アーティストは共に、耐え難い状況の恐怖や記憶に対し、新しいメディア技術で表現しようとしている。今日では新しいメディア技術が、純粋美術と携帯電話世代とのかけ橋の役割を果たしているのだ。携帯電話世代は常に画像（動画）に接し、象徴や記号に基づいた言語を造り、現実的で象徴的な解説をする。この世代は、必要最低限にしか言語に触れないので、じっくり本を読むことはあまりない。彼らがヒロシマやホロコーストの悲惨な話を知るのは、新しいメディアを用いるアーティストを通してなのだ。それらの作品は、本や他のもの以上に効果的に記憶や印象を伝えることがある。だからこそイスラエルと日本において、この種のアートが重要なのである。

戦後 70 年の記念の年ということで、日本現代アーティストの 50 以上の魅力ある作品展示がされているのだが、ミュージアム訪問者の興味を引いている。犠牲者に何が起きたのか、大惨事後、生存者たちが何を体験してきたのかを考えるきっかけになる。これらの展示は個人と集団、両方の記憶である。何よりも、大惨事が起きる前と同じ人生には決して戻れず、一つとして同じ人生などないのである。

ユダヤのホロコーストに関する現代アート展は、刺激的で新鮮な手法を持つ多くのアーティストがいるのにも拘らず、今までこの規模で、イスラエルで催されたことはなかった。時々、1~2 人のアーティストが展示をしたことはあるが、生存者やその家族によって不快で品がないと非難されることが多かった。

イスラエルと日本は他にも共通点がある。日本はガラパゴス化現象を抱える島国だと思われていて、人々のユニークさが際立ってきた。イスラエルも隣国などから孤立していて、同じ現象を有している。イスラエルが国際的なつながりを持とうとする時は、空路か海路を使うことになり、日本同様、ある意味で島国だといえる。付け加えて、イスラエル独自の言語や宗教や歴史を持っている。しかしながら、ここ 20 年はインターネットの接続で、日本もイスラエルも世界から孤立できなくなっている。これが、イスラエルで展示をすることになった事情の一つである。

イスラエルの第三世代による、ホロコーストに関する新しい手法の作品の展示を、日本で催されることを提案したい。イスラエルに届く批評や印象は、若い世代に展示の重要性を知らせることになるだろう。それらの反応が、イスラエルで展示を創る土壌を育てることになるのだ。

* 注：ヒロシマの原爆

世界初のウラン爆弾が 1945 年 8 月 6 日午前 8:15 ヒロシマに落とされ、その年のうちに 140,000 人が亡くなった。70,000 人がその後、放射能の後遺症で生命を失った。生存者も社会偏見で苦しみ続けた。



写真展「戦後はまだ・・・刻まれた加害と被害の記憶」

フォトジャーナリスト 山本宗補

「戦後はまだ・・・加害と被害の記憶」のタイトルで一昨年に出版した大型写真集の写真展を全国各地で巡回している。

今回は開催期間二ヶ月という長期の大型写真展が、立命館大学国際平和ミュージアムにて5月3日に開始したところだ。広い会場に写真集に収録した70人のモノクロ肖像写真と、一人ひとりの戦争体験の聞き取りの一部を解説文として展示している。加えて特大プリントも9点用意し、天井から吊ったり壁に貼ったりした。

私が戦争体験者の聞き取りを本格的に始めたのは戦後60年の年だった。政府による侵略戦争を否定するような動きに危機感を抱き、フォトジャーナリストとしてできることは何かと自問した結果だ。一人でも多くの戦争体験者の聞き取りをして、加害者としての記憶や被害者としての記憶を、肖像写真と組み合わせ、次世代が戦争の実態を身近に感じられるような形に残したいと願ったところからスタートした。

戦争体験を記憶や身体に深く刻んだお年寄りは誰しもが90歳前後を向かえ、近いうちに一人残らず向こうの世界へと旅立ち、歴史を改ざんしようとする戦後生まれの権力者にとり都合の良い時代が来ることは間違いない。

これまでに90人をこえる戦争体験者の取材をしたが、自国民310万人の犠牲だけでなく、2000万人をこえるといわれる旧日本軍による死者という、途方も無い犠牲を元に、戦後の日本国憲法が国民に歓迎され、70年の間、自国の平和の維持に貢献してきたと強く実感している。

戦後70年、いま日本社会は、侵略戦争を繰り返さないことを誓った9条を持つ平和憲法が、安倍政権与党により葬りさられようとする瀬戸際にある。私の写真展が、戦後生まれの戦争の記憶を持たない若い世代に見て感じてもらい、権力者による歴史の改ざんを許さない知識の一助になることを強く希望するのはそのためだ。

メールアドレスは[こちら](#)。



福島菊次郎氏による写真ポスター。最近の京都での展覧会より

2016年 平和のためのグローバル
アートプロジェクト:第12回
平和のための隔年国際アート交流

「2016年平和交流のためのグローバルアートプロジェクト」の登録受付が始まりました。アートを通じた世界の平和と親善の多文化の祭典へ、参加者（大人、子供、個人、グループ関係なく）を世界中から募集しています。どなたでも参加できます。世界中の参加者が平和的な国際社会へのそれぞれの思いを表現したアートを作成し展示、交流を行います。そして、2016年4月23～30日の一週間、何千もの平和と親善のメッセージが同時に地球上をめぐる。

アートを通して平和の文化を楽しく創りあげることが、グローバルアートプロジェクトの使命なのです。1993年の開始から、全七大陸の85カ国13万人が参加してきました。個人でもグループでも参加できます。

登録はこちらから：<http://www.globalartproject.org/>

「2016年平和のためのグローバルアートプロジェクトポスター」のフリーダウンロード、プロジェクトの詳細、参加やボランティア、出資方法については、

こちらの[リンク](http://peace@globalartproject.org)もしくは peace@globalartproject.orgまでメールをお願いします。グローバルアートプロジェクトはINMPの会員であり、米国アリゾナ州トゥソンにある非営利非課税団体（501(c)3）です。



私達は本当に貢献できるのか？ ミュージアムと平和構築

キンバリー・ベイカー（カリフォルニア、リッチモンド、国立歴史地区ブリタニア・シップヤーズ）

4月25～29日、ジョージア州アトランタのジョージア国際会議場にて全米ミュージアム連合2015年年次会議とミュージアム・エキスポが行われた。本年度の議題は「ミュージアムの社会的価値：変化をもたらす」で、ミュージアムが変化の手段としていかにしてさらに大きな役割を果たすことができるかを考える機会となった。

私が感動したセッションは、「国境なき文化遺産（CHWB）」がどのように民主主義や人権、平和構築を支援しているかを検討した「私達は本当に貢献できるのか？ミュージアムと平和構築」。英国エクセター大学の上級研究員ダイアナ・ウォルターズ氏が議長を

勤め、この困難な分野にわたる会議を進行した。「ミュージアムが平和に貢献するにはどうすればいいか」という議長の会議に対する問いかけに応え、変容の場所としてミュージアムを利用するという3つの異なる平和構築の取り組みについて発表が行われた。

シカゴのイリノイ大学、ジェーン・アダムス・ハルハウス・ミュージアムのイリーナ・ザドフは「平和地区：シカゴとプノンペン」と題したプロジェクトを発表。このプロジェクトは、15人の青少年間の文化交流を支援しており、そこで彼らは実地研究、ストーリーテリング、ドキュメンタリー映画、展覧会計画などを通し、暴力の根源や平和構築実践を研究している。イリーナによれば、「このような話を語ることにより癒しの場を作ることができることに若者らは気付いている」。また、「平和地区」の若者らは、平和サミットに出席し、さらに平和的で正しい世界のための環境を整えるため知識を共有する予定だ。

バルカン・ミュージアム・ネットワーク運営委員会会長のタチアナ・ツヴィエティチャニンは、バルカン諸国の新たな国民アイデンティティについて説明した。地元、地域、国家の体験についての話や対談を聞いたりと共有したりする安全な場所を人々に提供することで、ミュージアム内で感覚的に学ぶことが出来ると主張した。次の段階は回復と和解であろう。

ケニアのアカンバ平和ミュージアムの創設者でキュレーターのカヌヴェ・ムティシヤは、有形文化が平和構築に貢献すると主張した。視覚的伝統や伝承にみられるケニア土着の平和の文化的価値の探求を目指すケニア生まれの民俗誌学者スルタン・ソムジー博士が1994年に設立した地域平和ミュージアム・ヘリテージ財団（Community Peace Museums Heritage Foundation, CPMHF）について言及した。カヌヴェは、15のミュージアムが平和の生きたシンボルとして土着の有形文化に接する機会を与えている様子を語り、それは、知識の共有、平和の対話、社会の復興を促す架け橋となると話した。

最後に、ダイアナは「他のミュージアムが平和のための変化の手段としてどの様になれるのか」と探りを入れた。イリーナは「この信念のため、私達の活動に

参加してほしい」と誘い、タチアナは「私達自身の遺産と物語のために重要な場となるべき」と訴えた。ムヌヴェは、「対話と学習、交流を通じた変容の場となり、そうした話し合いの場を作っていこう」と奨励した。

このセッションは、ミュージアムの社会的価値を実現する方法、そしてミュージアム関係者として平和構築に私がどう貢献できるかについて深く理解する助けとなった。

キンバリー・ベイカーは、カリフォルニア州リッチモンドのブリタニア・シップヤーズ国立歴史地区のアクティング・ヘリテージ・コーディネーターでありコミュニティ・プログラム・ファシリテーター。また、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の博士課程の学生であり、「Wayfinding Peace: Museums of Peace in Conflict Zones (平和を求めて：紛争地帯の平和ミュージアム)」のタイトルで論文執筆中。[ウェブサイト](#)と[メールアドレス](#)はこちら。

「若者の平和メッセージ」と他プロジェクトとのコラボレーション

日本平和教育地球キャンペーン 中四国部幹事
赤松教子

「若者の平和メッセージ」応募の計画プロジェクトが始まりました。レベッカ・アービー氏とウェスタン・ニュー・メキシコ大学教育学部ニューメディア助教授のピーター・ビル氏のおかげで、応募作品は音楽とともに短編の芸術的なドキュメンタリー映画として上映されます。アービー氏が製作したドキュメンタリー

「That Day」は[こちら](#)から観ることが出来ます。この映画は被爆者らの一連のインタビューから成っています。

アービー氏はまた、「平和のためのアート・ワークショップ」のアドバイザーの1人です。2015年3月28日から4月4日まで長崎と広島で行われたこのワークショップでは、米国、中国、日本から平和ミュージアムに訪れた21人の若者達が被爆者らの証言を聞き、

平和のアート作品を共に作成しました。「若者の平和メッセージ」の事務局の一名が、ボランティア通訳としてワークショップに参加しました。「若者の平和メッセージ」応募作品のいくつかはワークショップでの上映に提供されました。参加者が彼らの作品コンセプトを説明したビデオはYouTubeの[こちら](#)から。

本ワークショップは、広島平和文化センターの前会長スティーブン・リーパー氏とピカドン・プロジェクトによって開催されました。ピカドン・プロジェクトは、世界中の芸術家や活動家らが若者らと共に協力し、原子力問題に関する地球規模の対話を持つための革新的な芸術構想を創造するという、2004年より世界の15都市で行われているものです。ニューヨークのドキュメンタリー・フィルム制作者の西前拓氏、「ヒロシマ」の著者ジョン・ハーシー氏の孫であり芸術家であるキャノン・ハーシー氏の両者は、このワークショップを支援したピカドン・プロジェクトの会員です。こちらの[リンク](#)をごらんください。

「若者の平和メッセージ」プロジェクトはまた、「キッズ・ゲルニカ in ひろしま 2015」と連携する予定です。広島の子供達が、世界中の多くの人々とともに平和の壁画を描きます。このプロジェクトのリーフレットは[こちら](#)から。

1937年のスペイン内戦における残虐な爆撃に対する抗議のため、パブロ・ピカソは「ゲルニカ」を制作しました。ピカソが「ゲルニカ」を描いたのは3.5m x 7.8mのキャンバスでした。その同じサイズの絵を子供達が描く地球規模の活動が「キッズ・ゲルニカ」なのです。詳細は[こちら](#)から。

「キッズ・ゲルニカ in ひろしま 2015」はこの活動の一部です。このプロジェクトの展覧会は、7月24～27日の広島平和記念公園を始め日本国外で数多く開催される予定です。8月11～19日には、インドネシア、バリ島ウブドの国際展示会にて壁画が展示されます。スペイン、ゲルニカ市でのキッズ・ゲルニカ国際展示も予定されていて、そちらにも壁画が展示される予定です。

「若者の平和メッセージ」作品は、そのコンセプトを考慮して壁画の一部のデザインに採用するため、キ

ッズ・ゲルニカの参加者が見たり読んだりすることになっています。このプロジェクトは、学校や博物館、地域社会にも、よりよい対人関係促進する機会をつくることができます。

詳細はこちらの[メールアドレス](#)赤松敦子まで。



キッズ・ゲルニカ in ひろしま 2015 の壁画を描く幼稚園の子供達

「平和のための博物館」研究

INMP 理事及びカラチ技術起業研究所教授兼
学籍事務官サイード・シカンダー・メーディ

平和運動の歴史は、戦争美化からの脱却と平和学の基礎構築に平和教育や平和研究が重要な役割を果たしてきたことを示している。あまり評価はされていないものの、EUや北米を含む数々の地域からの戦争がなくなってきたのは、会議室や学会の講義室から生まれた平和思考と平和認識のおかげである。

しかしながら、女性問題や子ども人権、紛争解決、民主主義と尊厳、貧困削減、軍縮と武装解除、識字率の向上、資源の均等配分、持続可能な開発など、学会はこれまで多くの講座を提供してきたにもかかわらず、「平和のための博物館」活動の実質的な講座を持つ準備はまだ整っていない。その結果として、今日の若年層や世論のリーダー達、政治家、そして多くの平和運動家達でさえこの活動の平和的役割や可能性、変化の力に気づいてはいない。

先進国、途上国において、その資格や学位、学位プログラムなどを計画し、特に世界中の若者達に「平和のための博物館」活動を紹介する時が来ている。「平

和のための博物館」研究の正式な導入は、明らかに学会が進めるべき重要な一步である。特に1992年の英国ブラッドフォードでの「平和のための博物館国際ネットワーク（当初の名前は「平和博物館国際ネットワーク）」創設以来、長年にかけて、ハーグに事務局が作られ非営利財団と発展し、定期的な平和博物館をテーマとした国際会議が開催されており（1992年英国ブラッドフォード、1995年オーストリア・シュタットシュライニング、1998年大阪・京都、2003年ベルギー・オステンド、2005年スペイン・ゲルニカ＝ルモ、2008年京都・広島、2010年スペイン・バルセロナ、2013年オランダ・ハーグ、2014年韓国・ノグンリ）、「平和のための博物館」運動は躍進を遂げてきている。各国で新しい平和博物館が現在も作られている。さらに、平和博物館関連のテーマにした研究論文や編集書籍の発行に大幅な伸びがみられる。従って、今こそ平和博物館が学会に参画するのにふさわしい時期なのである。

おそらく、学会への最適な道は、7～10日間の平和博物館コース修了講座の創設から始めるのがよいだろう。講座は、若い大学生、NGOやメディア関係者、若い博物館員や平和活動家に向けて、国際的な教授陣によって運営することができる。そうした講座は、広島平和記念資料館や京都国際平和ミュージアム、または世界中の確立されたいかなる平和博物館でも毎年行うことが可能であろう。そのようなプログラムはまた、様々な平和博物館による同時開始も行えるだろう。

もちろん、資金調達は大きな問題となるはずである。しかし、次回の国際会議の直前に5日間の修了プログラムを開催し、妥当な規模でINMPによって着手することも可能である。そのプログラムを、会議が開催される場所で開始し、10～15人の若者を講座出席に招待することもできる。INMP会議に参加する研究者や博物館関係者の中には、数日早めに到着して地元の平和博物館専門家らと協力のもと講座を担当できる者もいるだろう。修了講座は、若い受講者らも会議に参加できるようにINMP会議の前日に終了するべきである。このプログラム開発のINMP作業委員会には当方も喜んで参加しよう。関心があれば、この[メールアドレス](#)まで連絡をください。



広島平和記念資料館

平和ミュージアム、 ニューヨークタイムスで紹介

2015年3月16日付のニューヨークタイムスにデヴィッド・ゲルスの記事「展示物と同様に姿勢と信念を紹介する博物館」が掲載された。3月19日には記事への批評が、「単なる物だけではなく唱道の時」という題で発表された。

以下は批評の一部である。

ニューヨークでは、「[ニューヨーク市平和博物館](#)」を作るプロジェクトが現在進行中である。100以上のミュージアムが存在するような都市では、そうした施設は注目を集めようと躍起になるものだ。しかし、このSuZenという名のアーティストが作ろうとしている平和博物館は、後援者を魅了し続けている。「ほとんどのミュージアムでは、そこに行ってただ壁にある絵を見るだけ」SuZenは言う。「私達のはそうじゃない。平和を促進するためのもの。人々が行動を起こすきっかけになったりするはず。」平和博物館は目下のところ、常設できる建物を確保するべく資金を集めている最中だ。SuZenは、象徴的理由から、博物館の場所はマンハッタン南部のグラウンド・ゼロの近くにしたいという。展示はガンジーやマザー・テレサなど平和活動家らを讃えるものとなるだろう。「戦争博物館があるのだから、平和博物館が無いなんてね？」展示の場

としてだけでなくコミュニティ・センターとしての平和博物館を思い描いているSuZenは、さらに大きなトレンドへと進出しようとしている。

博物館の定義に関し、ゲルスは、博物館同盟の博物館の未来センター創立責任者であるエリザベス・メリットの言葉を引用している。「アメリカ博物館同盟も博物館図書館サービス振興機構も、博物館とは何かという公の定義を公表してはいない。ひとつには、ごちゃごちゃしたコンセプトに線を引くのが困難だからである。アメリカでは、誰もが何を持って博物館と呼ぶことが可能であるし、実際に呼んでいる。この20年間で大いに盛り上がりを見せている見解のなかに、博物館は教育する場所ではなく集まって話し合う場であるという意見がある」ゲルスによれば、ニューヨーク平和博物館のような新しい試みが、そうした複合体の一部となる道を模索しているのだ。

ゲルスはこう続ける。「同様の取り組みがフィラデルフィアでも進行中で、ある団体が2020年までの開館を目指して未来平和博物館を計画中だ。こうした博物館に大規模な常設展示が無いとしても驚くに値しない。高騰する費用と良質品不足のせいで、新しいコレクションを集めるのはこれまでになく困難になっている。しかし、博物館とは何かという今日の再編されたビジョンにおいては、これは問題にはならないかもしれない」

「博物館とは主に問題に対して社会として焦点を合わせるものであるという考え方から、私達は過去150年に渡り変化してきた」メリット氏は言う。「どんな博物館職員も、いざとなれば、収蔵品を保存することが彼らの仕事の重要な部分を占めていると言うはず」そしてこう続けた。「けれど、究極的にはそこに意義があるかないか」

記事の全文はこちらの[リンク](#)から。

アメリカ博物館同盟の情報は、こちらの[リンク](#)から。

博物館の未来センターの情報は、[こちら](#)から。

米国博物館図書館サービス振興機構（及び 35,000 の会員）の情報は、こちらの[リンク](#)から。

平和博物館と平和教育の源： 「FALLOUT」 in Japan

映画制作者 ピーター・カウフマン

2015年3月の広島、名古屋、大阪、京都でのプレミア上映とともに、日豪交流基金から出資され「FALLOUT in Japan」イニシアチブが日本全国で最近、発足した。「FALLOUT」とはオーストラリアの長編ドキュメンタリーであり、プロデューサーとして大変幸運にも、私は映画と同行しその中にある問題や制作について日本のオーディエンスとともに議論することができた。特に「FALLOUT in Japan」プロジェクトは広島と長崎の被爆70周年に捧げることであり、これは私にとって間違いなく大変感動的な経験であった。

「FALLOUT」は、グレゴリー・ペック、エヴァ・ガードナーを主演にスタンリー・クレイマー監督によって1959年ハリウッド映画化されたネビル・シュートの反戦小説「渚にて」を探求したものである。シュートは小説家であるだけでなく航空技師であり、第二次世界大戦中にドイツに対して使用する秘密兵器の開発にも関わっていた。しかし、米軍のマンハッタン計画と日本への原爆投下の本質を知り、彼の良心は激しく試されることになる。原子分裂によるその途方もない強力な力の使用と開発における科学者と政治家の役割と責任を問い、シュートは、核拡散の危険性と「人間と制御不能の機械」の世界に対する予言的警鐘として「渚にて」の執筆に至った。

あっという間にアメリカのベストセラーのトップに躍り出たこの小説は、世紀末的放射能の雲が私の生まれ故郷オーストラリアのメルボルンを覆う中で死を待つ最後の人間達を描いている。ウィンストン・チャーチルを含む各国指導者が指導者のために推薦する本となった。しかし、米国のアイゼンハワー政権は、米国民が核戦争の本質に気づいてしまう影響を恐れ、映画の製作を妨害し公開時には完全なSFだと批判した。

原作、映画ともに、当時オーストラリア、マラリングアの砂漠で行われた英国の核実験と時期を同じくした。

私が初めて「渚にて」に関する映画製作を「FALLOUT」の監督と検討し始めたのは20年前だが、映画館上映用のドキュメンタリー映画の資金調達は決して簡単なものではなかったし、物語修正のためにも闘った。西洋社会で私達は、戦争を終わらせるためには日本への原爆投下は必要だったと信じるよう教育を受けている。しかし、私が横浜に住んでいた1999年の一年間に、他方の視点からの話や広島・長崎で実際何があったのかという身も凍る話を聞き始めた。西洋社会や他の国に当時の状況と1945年8月にいったい日本で何が起こったのかを私達が伝えることが重要だと初めて気付いたのは、ポール・ハムの著書「ヒロシマ・ナガサキ」（2012年）で、マンハッタン計画と原爆投下に関して暴露した衝撃的な内容を読んだ時だった。



映画「渚にて」のメイキングより

「FALLOUT」が今年後半に京都や日本各地で再度上映されることが望まれています。「FALLOUT」の詳細、DVDや参考資料（日本語版、英語版）、については、[こちらのアドレス](#)までご連絡ください。

「FALLOUT」は「歴史・社会・政治問題最優秀ドキュメンタリー」部門にて2013年アトム・アワードを受賞。アトム・アワードは、オーストラリア・メディア教師会（ATOM）によって設けられた名声のある映画とメディアの賞である。

平和は甘美

ちょうど500年前、偉大なる人文主義者であり並外れた戦争批判者であるロッテルダムのエラスムスが、「戦争に無知なものだけがそれを甘美と呼ぶ (Dulce Bellum Inexpertis)」という有名な格言に対する論評を初めて発表した。周知の通り彼は「戦争は地獄であり平和は天国だ」と反対を唱えた。平和は甘美だという考えは現在もまた、INMP 会員であるヴィンセント・シュティットラーの想像力に富み起業家精神に溢れた取り組みの中にも示されている。3月26日彼は、ハーグ市議員(ビジネスと都市マーケティング)であるカルステン・クラインと共に、市の新しい土産物を発売した。デルフト・ブルーのギフトボックスに入ったチョコレートの「平和宮」である。このチョコレートは、平和宮、そして平和宮が建設されることになった1899年と1907年の平和会議に関する記念品の彼の豊富なコレクションからオリジナルの型を使い製作された。平和宮の建設についてはアンドリュー・カーネギーの惜しみない支援がなければ不可能であったため、そのコレクションは、ビスケット缶やシガーボックスなどこの後援者を描いた多くの品々も含まれている。過去10年間でコレクションは1000点を超えた。約50種類から成り、水彩画や灰皿から陶器、コップ、メダル、皿、パズル、スプーン、織物や花瓶などに及ぶ。

その類では最大のコレクションであり、公開から現在に至るまで、大衆文化における平和宮の影響を示している。平和宮自体も含めて市内の博物館は、高い頻度でそのコレクションから展示目的で借り出している。例えば、2013年に開催された平和宮100周年記念関連の様々な展覧会でも貸出しが行われた。同時にヴィンセントは、この公開の機会を利用し「バーチャル平和宮博物館」を立ち上げた。ぜひこの[リンク](#)より、様々に描かれたこの象徴的建物をご覧になっていたきたい。現在、コレクションには特別な「食べられる」作品が加えられている。この作品は、彼の会社ピースギフトがハーグの土産物として最初に導入したものである。この唯一のものとはならないであろう珍しい土産物を提供することで、彼はまた、ハーグ市への大勢の訪問者の意識を高め平和を推進するつもりだ。

INMPは、この意欲的な仲間に祝辞を述べると共に、彼が設立した平和企業の成功を祈るものである。ヴィンセント(写真左)とは、こちらの[アドレス](#)から連絡が可能。また、こちらの[ホームページ](#)、または[こちら](#)もご覧ください。



INMPの紹介

INMPの前身である「国際平和博物館ネットワーク」(International Network of Peace Museums)は1992年にイギリスのブラッドフォード大学のピーター・ヴァン・デン・デュンゲン教授のイニシャチブで組織されました。その後、およそ3年に1度の割合で「国際会議」を開催してきました。第1回ブラッドフォード(イギリス)、第2回シュタット・シュライニング(オーストリア)、第3回大阪・京都(日本)、第4回オステンド(ベルギー)、第5回ゲルニカ(スペイン)、第6回京都・広島(日本)、第7回バルセロナ(スペイン)、第8回ノグンリ(韓国)。そして、現在、2017年に開催予定の第9回会議の開催場所の選考過程にあります。

ネットワークの名前は、いわゆる「平和博物館」だけでなく、平和のための展示などに取り組んでいる美術館や資料館とも共同関係を広げるために、2008年の第6回会議の時、「平和のための博物館国際ネットワーク」(International Network of Museums for Peace, INMP)と改称し、定款に明記されました。今後も会員の拡大、共同関係の発展が期待されています。

新刊

2015年4月8日、広島県は最新版「ひろしまレポート」を発表しました。「ひろしまレポート 2015年版」は、36カ国の2014年における核軍縮、核不拡散、核安全保障の実績を研究、分析、評価したものです。

「ひろしまレポート 2015年版」は、核保有国に対し核軍縮の申し立てを展開し非核保有国の取り組みを紹介しています。

安全保障への新しい対策を取る動機付けができるよう、ひろしまレポートが世界中に広く知れ渡ることを願うと述べました。



[ひろしまレポート 2015年版 \(全体版\) 3.99MB](#)

[ひろしまレポート 2015年版 \(概要版\) 537KB](#)

詳細は ⇒ [広島県平和推進プロジェクト・チーム](#)

電話: 082-513-2366, Fax: 082-228-1614, Eメール:
chiheiwa@pref.hiroshima.lg.jp



編集ノート

編集委員メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳のお世話は谷川佳子さん、翻訳は竹田敦子さん、寺沢京子さん、藤田明史さんが担当して下さいました。

INMPの会員そしてニューズレターの読者のみなさん、随時ニュースなどの投稿をお願いします。

「平和のための博物館国際ネットワーク」のニューズレターは、原則年間4回発行されます。原稿は随時、英語で500単語以内、写真は1-3枚。

あなたの名前と所属を書いて、news@inmp.net に送付してください。

英語で書くことに困難がある場合には下記にご相談ください。

「平和のための博物館国際ネットワーク」(International Network of Museums for Peace, INMP)を支え、さらに発展させるために、さらに、新たな会員を迎え入れることが期待されています。現在の年会費は2000円、日本での会員事務は、下記の「安齋科学・平和事務所」が代行しています。

INMP 日本事務局: 安齋科学・平和事務所 (ASAP)

事務局は月水金の午後 13 時～15 時 30 分に開いています。

電話: 075-741-7267 FAX: 075-741-7282